



会員企業訪問シリーズ  
**神田わが街**

第3回

スター食品工業株式会社

我が国初のシロップメーカーとして明治31年に千代田区九段にて創業。日露戦争、関東大震災、太平洋戦争という幾多の危機を乗り越え、現在もホテル・レストラン・バー・喫茶店・居酒屋など業務用製品を中心に展開している。写真は創業100周年記念事業の一環として建てた12階建の本社ビル（一ツ橋フオレスター）

企業データ

- 本社 東京都千代田区一ツ橋二丁目5-3  
TEL 03-3230-3456  
FAX 03-3230-3458
- 創業 明治31年（森田飲料製造所）
- 設立 昭和22年（スター食品工業株式会社）
- 資本金 8,000万円
- 従業員数 6名 2023年6月現在



社史が物語る  
「伝統」と「革新」

精鋭部隊の近衛師団が取引先

風鈴の涼しげな音色が響く縁側に浴衣で座り、キンキンのかき氷に舌鼓を打つ。イメージするだけで、涼を感じられるのではないだろうか。日本の夏になくはならないスイーツ。このかき氷に欠かせないのが色とりどりのシロップだ。神田一ツ橋（今の住所では千代田区一ツ橋）に本社を構えるスター食品工業株式会社は、我が国初のシロップメーカーである。創業1898年（明治31年）。アジアの小国に過ぎなかった日本が急速に近代化を遂げ清国に勝利したのが1895年。そして、日露戦争の火ぶたが切って落とされたのが1904年。同社が創業したのは、この日清日露戦争の激動期だ。当初は日本陸軍の精鋭部隊であった近衛師団に、シロップやラムネを納入していたという。軍人たちの疲労回復に、当時は唯一だった国産シロップの糖質が大きな働きをしたに違いない。

創業者、森田慶蔵の嫡男、森田仙蔵は学校卒業後、家業を継がずに三井物産に入社。中国の漢口支店に勤めていた時に関東大震災が起き、これを機に日本に帰国して父の跡を継ぐことに。商社で培った近代経営学を家業に取り入れ、最先端



東京神田が  
いいアクセントになっているロゴ

の清涼飲料メーカーとしての地位を築くことに心血を注いだ。

日本のクリームソーダーが  
緑色のワケ

「クリームソーダーは和食だとよく祖父が言っていました」と語るのは、二代目の孫にあたる森田修平さん。現在の同社常務取締役である。我が国でクリームソーダーと言ったら、メロンソーダーの中にアイスクリームを浮かべたものを指すのが一般的だ。しかし、本場のアメリカでは無色透明のソーダーにアイスクリームを浮かべたものをクリームソーダーと呼ぶそう。なぜ、日本ではメロンソーダーなのか。「祖父はシロップにオレンジ、パイナップル、メロン、チョコレートなど、それぞれの風味と着色をすることに成功しました。当時は、それらを主にパーに納入し



明治31年から昭和20年までの商品ラベル。時代の最先端をいっていたと思われる洗練されたデザイン

ていました。カクテルに混ぜて使っていたんです。その納入先の一つに銀座の資生堂パーラーがありました。当時はハイカラなカフェレストランであり、「芸の新橋」と呼ばれ一目を置かれていた新橋の芸者さんが三味線の稽古の行き帰りに利用したので、三味線置き場があったと言われていました。その「新橋芸者」の間で流行ったのが、無色透明のソーダーに緑色のメロンシロップを混ぜ、その中にアイスクリームを浮かべたもの。これがクリームソーダーと呼ばれるようになり、広まったんだと祖父からよく聞かされました。だから、クリームソーダーは和食なんだと」二代目が作った各種シロップは、当時日本で最も権威のあったバーテンダーの品評会で最優秀賞や最高人気得票賞などを次々に受賞し、ナンバーワンのシロップメーカーの地位を揺るぎないものにしていった。

業務拡張のため、昭和7年に創業地の九段から現在の一ツ橋に移転。二代目の嫡男、禮治さんも入社し、シロップとともにジュースの開発にも着手。そして終戦後間もなく、1949年に日本で初めての国産瓶入りオレンジジュースとなる『ハワイアンオレンジード』を発売。翌1950年には、やはり我が国初となるコンクエード（希釈用果実飲料）の開発にも成功した。

100年企業の「伝統」と「革新」

森田常務の座右の銘は「不易流行」。「いつまでも変わらない本質的なものを大事にしつつ、新しい変化も取り入れる」という意味である。これは取りも直さず同社の歴史そのものであり、100年企業の共通項ともいえる「伝統」と「革新」だ。歴史にあぐらをかいては老舗企業の存続は難しい。変化を恐れずに率先して新しいことに取り組む姿勢こそが、企業経営には求められるのだ。同社には日本初や業界初という製品が多くある。100%ストレート果汁製品の販売もそうだし、PETボトル（1.8ℓ / 1ℓ）



とても戦前のもとは思えないラベル

を採用したのも業界では同社が初めてという。また、1953年には飲料用水の食品防腐剤『Ever Green』を発明し、東京都から優秀発明品として認定を受け「発明奨励金」を授受。専売特許を取得した。

2000年には三代目の嫡男である晃生さんが社長に就任、そして次男の浩司さんが専務に、三男の修平さんが常務に就任。現在は三兄弟が力を合わせて盛り立てている。晃生社長が「東京都清涼飲料協同組合」や「東京清涼飲料水工業組合」の理事長を務めるなど、飲料水業界関連の業務は二人のお兄さんが担当し、法人会や町会など地域に根差した活動は修平常務が担当している。

「今から20年ほど前に青年部会の部会長をやらせていただきました。あの頃は、人生で一番楽しかったといっても過言ではありません（笑）。全法連青連協からの依頼で小学生に租税教育をやるということになり、自分が税金を使う立場だったら何に使うかというテーマの作文コンテストを千代田区内の小学生を対象に開催しました。全部で600通くらい集まりました。我々青年部会で選定をして、共立講堂を借りて、スピーチコンテストをやりました。スピーチだけだと人が集まらないかもしれないので、和泉小学校のジャズバンドを呼んで演奏会もやりました。ゲストにNHKのちゅらさんの脚本を手掛けた岡田恵和さんを招いて。自分たちの好きなようにやらせてもらって、優秀なスタッフにも恵まれて楽しかったですね」と修平常務は往時を振り返る。脚本家の岡田さんとは大学の同級生。修平常務は学生時代に体育会系のゴルフ部に所属していた。卒業後には同大学のゴルフ部監督も務めた。今でも精力的にコースを回っており、自他ともに認めるゴルフ好き。「昔は神田法人会にもゴルフ会というのがあったんです。それを復活させようという目論んでいるところです（笑）」青年部会や法人会で出会った



向かって右は2003年に発売し大ヒットした『お疲れさんにクエン酸！10倍希釈用』。真ん中は『高濃度クエン酸シトラス』。右は常務プロデュースの『スター塩みかん 1,000ml 5倍希釈』

諸先輩から、さまざまなことを学ばせてもらったという修平常務。「ある意味、法人会の活動などにまい進できたのは、二人の兄がいてくれたからでもあります。そういう点でも、兄たちに心から感謝しています」創業125年の老舗企業を継いだ三人兄弟の末弟として、修平常務が心を込めて二人のお兄さんへの感謝の言葉を口にしていたのが印象的だった。

レポート◎山根和明（広報委員会）

スター食品工業株式会社

常務取締役  
森田修平（もりたしゅうへい）

1959年3月13日東京都千代田区生まれ。1981年に大学を卒業後、大手コーヒー問屋に就職。3年間勤めた後、空前のサワーブームが起きスター食品工業株式会社に呼び戻される。2000年に同社常務取締役就任。神田法人会二地区会長 事業研修委員会委員長。2005～2007年に青年部会の部会長を務めた。二女の父。趣味はゴルフ、音楽鑑賞、映画鑑賞、食べ歩き。

